矢作川研究　No.30：79 ～ 86，2026

愛知県豊田市内の西中山川と御船川における特定外来生物オオバナミズキンバイの県内初記録と早期防除について

First record and rapid response for an Invasive Alien Species, *Ludwigia grandiflora* in Toyota City, Aichi Prefecture, Japan

浜崎健児[1)]・山本大輔[1)]・大坪瑞樹[2)]・弘中陽介[3)]・菊地波輝[4)]・稗田真也[4)]

Kenji Hamasaki[1)], Daisuke Yamamoto[1)], Mizuki Ohtsubo[2)], Yosuke Hironaka[3)], Namiki Kikuchi[4)] and Shinya Hieda[4)]

要　約

2025 年 7 月，豊田市内を流れる西中山川と御船川の合流点付近で，特定外来生物に指定されているオオバナミズキンバイを愛知県内で初めて確認した．本種は種子だけでなく，植物体断片からでも開芽・発根が可能であるため，再生能力･分散能力共に極めて高い．河川や水路，水田などで繁茂すると，在来水生植物との競合だけでなく，稲の生育阻害や通水阻害による水害リスクの増加などが懸念される．これらの被害を未然に防ぐためには，発見後の迅速な対応が重要となる．そこで，まず，西中山川とその下流の御船川でオオバナミズキンバイの分布状況を調査したところ，最初の確認地点を含む 16 地点で本種の群落が見つかった．これらの確認地点は約 1.2 km の区間に限られ，このうち 12 地点は最上流の確認地点から下流約 260 m までの区間に集中していた．また，各群落のうち最上流の確認地点の面積が約 24 m^2 と最も大きく，他はその 1/3 以下だった．したがって，最初の侵入場所は最上流の確認地点であり，そこから分布を拡大している段階であると推測された．この結果を受け，愛知県と豊田市，豊田市自然観察の森，豊橋市自然史博物館，三河生物同好会の協働で直ちに駆除作業を行い，分布状況を把握してから 10 日以内に，すべての群落を目視や手探りで確認できる限り取り除くことができた．一方，その後の巡回調査では，取り残した茎や地下茎等から再生する芽生え，切れて流れたと思われる茎の一部などが複数見つかり，再び繁茂して分布域を拡大する可能性が示唆された．今後，群落を駆除した場所や下流域を対象に，取り残した部位やそこからの再生・繁茂の有無を定期的に巡視し，根絶に向けた駆除活動を継続的に実施していきたい．

キーワード：侵略的外来水生植物，生物学的侵入，アカバナ科，早期発見・迅速対応

はじめに

オオバナミズキンバイ *Ludwigia grandiflora* (Michx.) Greuter & Burdet[1)] は，アカバナ科チョウジタデ属に分類される多年生の水生植物である（志賀ほか，2018）．南アメリカ中部・南部を原産とし（Grewell et al., 2016），日本では 2005 年に和歌山県日高川町で初めて確認された（内藤・稗田，2014）．水質浄化資材や園芸用として持ち込まれ利用されていたものが，起源と考えられている（須山ほか，2008；内藤・稗田，2014；Hieda et al., 2020）．現在では，山形県や千葉県，福井県，鹿児島県など 11 府県で侵入が確認されている（国立環境研究所 HP）[2)]．

日本に侵入したオオバナミズキンバイは，生活形を浮葉形・抽水形・陸生形に変化させることで，水辺から陸地までの幅広い環境に適応して繁茂することができる（稗田，未発表）．また，種子だけでなく，茎の断片や葉柄を伴う葉からでも開芽･発根が可能であるため（稗田，2018a；Hieda and Noma, 2019；伊藤・茂垣，2021；田中ほか，2020），再生能力および分散能力が極めて高く，侵略的外来植物の一つに挙げられている（環境省 HP a, b）．滋賀県の琵琶湖では，2009 年に初めて確認されて以降，南湖を中心に異常繁茂して，在来植物との競合や船舶の航行阻害などが懸念されるようになり，2014 年には「特定外来生物」に指定された（稗田，2022；上河原，2016；滋賀県 HP）．建設機械や作業船，そして人力などを駆使した広域での駆除活動によって，生育面積は 2016 年をピークに押さえ込まれているものの，現在も低密度管理に向けた駆除活動が続けられている（中井，2021）．また，本種は，琵琶湖につながる河川等を通じて下流域の京都府や大阪府へと分布域を拡大しており，異常繁茂が確認されている鴨川や淀川でも継続的な駆除が実施されている（横川ほか，2020；瀬口ほか，2022；京都府 HP）．

今回，豊田市内の西中山川と御船川（図 1）でオオバナミズキンバイが見つかり，愛知県内で初めての確認となった．今後，市内の河川や水路，水田などに拡がってしまうと，通水阻害による水害リスクの増加や水稲との

競合などが生じる危険性が高い．これらを未然に防ぐためには，現状を把握して迅速に対処することが重要となる（上河原，2016；稗田，2018b；嶺田ほか，2020）．本稿では発見の経緯とともに，その後に行った分布調査と駆除活動の結果について報告する．

図 1　西中山川と御船川の位置[3]．
図中の枠で囲われた部分はオオバナミズキンバイの群落が確認された範囲を示す（詳細は図 4 参照）．

発見された河川

西中山川と御船川の位置関係を図 1 に示す．西中山川は矢作川の二次支流で，同じく二次支流である山田川と合流し，一時支流である御船川となる．河川延長は，西中山川が約 4.6 km，御船川が約 2.3 km で，いずれも小規模な河川である．流域には山林や住宅地のほか水田や畑，果樹園等の農耕地も多く，その一部では両河川の水が農業用水として利用されている．

発見の経緯

2025 年 6 月 6 日，西中山川と御船川の合流点付近で水生生物調査を行っていたところ，水面に茎を伸ばして繁茂する見慣れない植物を発見した（図 2）．水面を這うように伸びる茎や丸みのある葉の特徴から，愛知県内では見つかっていない特定外来生物オオバナミズキンバイの可能性があったため（環境省 HP c），豊田市環境政策課に報告するとともに識別のポイントとなる花が咲く

図 2　水面を這うように茎を伸ばすオオバナミズキンバイ（左，2025 年 6 月 6 日撮影）と陸上で繁茂するオオバナミズキンバイ（右，2025 年 7 月 1 日撮影）．
水面で横向きに生長している時の葉は丸みを帯びているのに対し（左），陸上で上向きに生長している時の葉は細長くなっている（右）．

図 3　オオバナミズキンバイの花（左）と葉の基部にある托葉（右）（2025 年 7 月 9 日撮影）．
花は直径が約 4 cm，鮮やかな黄色で花弁は 5 枚（左）．葉の基部や茎には毛が密生している（右）．

まで状況を観察した（図 3）．開花が確認された 7 月 9 日に，豊田市自然観察の森が確認を行い，オオバナミズキンバイの可能性が強く疑われたことから，愛知県環境局自然環境課を通じて豊橋市自然史博物館学芸員で著者の一人である稗田に同定を依頼した．7 月 10 日に，稗田がメールに添付された画像を確認し，花が大型でかつ黄色であること，茎に毛が密生していることなどから，オオバナミズキンバイと同定した[4]．さらに，7 月 15 日に愛知県と豊田市，豊橋市自然史博物館，三河生物同好会の協働で現地調査を行い，オオバナミズキンバイであることを確認した．3 日後の 7 月 18 日には，発見の経緯と駆除の方針について，豊田市の報道発表資料として公開した（豊田市 HP）[5]．

分布調査

7 月 15 日に行った現地調査の際，最初にオオバナミズキンバイが発見された地点よりも上流の西中山川で複数の群落が確認されたことから，西中山川と御船川の全流程約 6.9 km を対象として，7 月 22–23 日に分布状況を調査した．また，御船川のもう一つの支流である山田川についても，西中山川との合流点からその上流約 1.8 km までの区間で 9 月 8 日に分布調査を行った．

河道内を踏査してオオバナミズキンバイの群落および切れて流れた植物体断片等の有無を確認し，発見した場合は地点の位置を地図または GPS を用いて記録した．また，群落については，おおよその面積（幅と長さ）も記録した．なお，地点の緯度経度データは，現地で記録した地図上の位置または GPS データをもとに，国土地理院の「地理院地図」（世界測地系：JGD2011）から取得した．

その結果，西中山川から御船川にかけて，河道内の砂州や護岸上の土手など 16 地点（最初の確認地点を含む）でオオバナミズキンバイの群落が，岸辺や堰下の水叩き

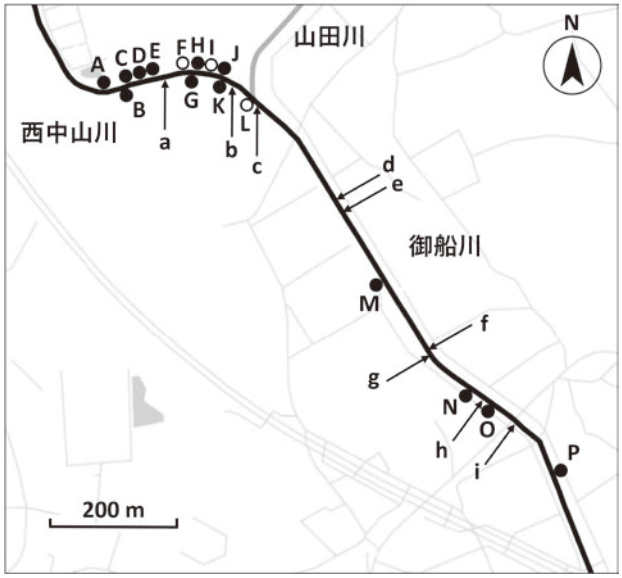

図 4　オオバナミズキンバイが確認された地点[3]．
○と●は群落，↑は植物体の断片（折れた茎の一部など）が確認された地点を示す．
○：7 月 15 日に駆除，●と↑：7 月 25 日に駆除（詳細は表 1，表 2 参照）．

表 1　オオバナミズキンバイの群落が確認された地点の位置情報と群落の面積．

地点	河川	緯度経度[1]	環境	群落の面積（幅×長さ）	確認日	駆除日
A	西中山川	35.141796, 137.186784	左岸側の砂洲	24 m^2（4 m×6 m）	7月22日	7月25日
B	西中山川	35.141807, 137.187073	右岸側の砂洲	2 m^2（0.5 m×4 m）	7月22日	7月25日
C	西中山川	35.141904, 137.187181	左岸側の砂洲	5 m^2（1 m×5 m）	7月22日	7月25日
D	西中山川	35.141943, 137.187288	左岸側の砂洲	4 m^2（2 m×2 m）	7月22日	7月25日
E	西中山川	35.141965, 137.187379	左岸側の砂洲	1 m^2（1 m×1 m）	7月22日	7月25日
F	西中山川	35.142066, 137.188318	左岸側の砂洲	0.5 m^2（0.5 m×1 m）	7月15日	7月15日
G	西中山川	35.141990, 137.188339	右岸側の砂洲	3 m^2（1 m×3 m）	7月15日	7月25日
H	西中山川	35.142062, 137.188388	左岸側の砂洲	4 m^2（2 m×2 m）	7月15日	7月25日
I	西中山川	35.142049, 137.188425	左岸側の砂洲	2 m^2（1 m×2 m）	7月15日	7月15日
J	西中山川	35.142033, 137.188463	左岸側の砂洲	2 m^2（1 m×2 m）	7月15日	7月25日
K	西中山川	35.141985, 137.188463	右岸側の砂洲	1 m^2（1 m×1 m）	7月15日	7月25日
L	御船川	35.141549, 137.189444	右岸側の砂洲	7.5 m^2（1.5 m×5 m）	6月6日	7月15日
M	御船川	35.138901, 137.191724	右岸側の土手	2 m^2（1 m×2 m）	7月23日	7月25日
N	御船川	35.137089, 137.193462	右岸側の砂洲	0.5 m^2（0.5 m×1 m）	7月23日	7月25日
O	御船川	35.136853, 137.193827	右岸側の砂洲	2 m^2（1 m×2 m）	7月23日	7月25日
P	御船川	35.135515, 137.195254	左岸側の砂洲	1 m^2（0.5 m×2 m）	7月23日	7月25日

1）各群落のおおよその中心地点の緯度経度を示す．
緯度経度は，現地で記録した地図上の位置と GPS データをもとに，国土地理院の「地理院地図」（世界測地系：JGD2011）から取得した．

表 2　オオバナミズキンバイの断片が確認された地点の位置情報と断片の数.

地点	河川	緯度経度[1)]	環境	断片の数	確認日	駆除日
a	西中山川	35.141917, 137.187567	右岸	1	7月22日	7月25日
b	西中山川	35.141886, 137.188972	蛇籠の上	2	7月23日	7月25日
c	御船川	35.141531, 137.189487	右岸側の砂州	2	7月23日	7月25日
d	御船川	35.140062, 137.190920	堰下流の水叩き	40程度	7月23日	7月25日
e	御船川	35.139812, 137.191139	左岸	1	7月23日	7月25日
f	御船川	35.137565, 137.192835	堰下流の水叩き	5	7月23日	7月25日
g	御船川	35.137504, 137.192878	右岸側の砂州	2	7月23日	7月25日
h	御船川	35.136885, 137.193806	右岸	1	7月23日	7月25日
i	御船川	35.136574, 137.194412	右岸	1	7月23日	7月25日

1）緯度経度は，現地で記録した地図上の位置と GPS データをもとに，国土地理院の「地理院地図」（世界測地系：JGD2011）から取得した.

など 9 地点で切れて流れたと思われる植物体断片が見つかった（図 4，表 1，表 2）．これらは約 1.2 km 区間に限られており，このうち群落の 12 地点と植物体断片の 3 地点は最上流の確認地点から下流約 260 m 地点までの区間に集中していた（図 4）．また，各群落のうち，最上流に位置する地点 A の面積が約 24 m^2 と最も大きく，2 番目に大きかった地点 L の約 3 倍に達していた（表 1）．一方，山田川では群落および植物体断片は確認されなかった．これらの結果から，最初にオオバナミズキンバイが侵入したのは地点 A であり，そこで繁茂した群落から生じた種子，切れて流れた植物体断片を介して下流に分布を拡大したのではないかと考えられる．また，地点 P の下流では群落や植物体断片などが確認されておらず，分布の範囲が両河川の一部区間に限られていることから，侵入からそれほど年数が経過しておらず，分布域を拡大しつつある段階であると推測された．

分布調査によって，オオバナミズキンバイが最初に侵入した地点は，確認地点の最上流にあたる地点 A である可能性が示唆された．前述の通り，本種は種子繁殖と栄養繁殖が可能であることから，これらの繁殖体が人々の往来や水鳥の移動などを介して持ち込まれ，定着したのではないかと考えられる．実際に，本種の亜種であるウスゲオオバナミズキンバイ（*L. grandiflora* subsp. *hexapetala* (Hook. & Arn.) G. L. Nesom & Kartesz)[1)] では，水鳥の糞に含有された種子が発芽能力を維持していることが確認されている（Hieda et al., 2023）．この他にも，オオバナミズキンバイは絶滅危惧種のミズキンバイ *Ludwigia peploides* (Kunth) P. H. Raven subsp. *stipulacea* (Ohwi) P. H. Raven と誤認されて園芸利用される事例が報告されており（Hieda et al., 2020），これらが逸出・定着した可能性も考えられる．いずれにせよ，オオバナミズキンバイは繁殖地から離れた場所であっても突如出現する可能性があることに注意が必要である．

駆除作業

分布調査の結果，オオバナミズキンバイの群落の数は 16 で，分布は約 1.2 km の範囲内と限定的であり，各群落の規模もそれほど大きくなかったことから，すべての群落を人力で駆除できると判断した．駆除活動は，種の確認のために現地調査を行った 7 月 15 日と，分布状況が把握できた後の 7 月 25 日にそれぞれ実施した．

7 月 15 日は，愛知県と豊田市，豊田市自然観察の森，豊橋市自然史博物館，三河生物同好会の総勢 12 名で，最初に発見した地点 L と，現地調査の際に確認した地点 F-K のうち地点 F と地点 I で，約 5 時間かけて駆除作業を行った（図 4，表 1）．愛知県と豊田市の参加者は初めての経験だったため，稗田が駆除のポイントを指導しながら以下に示す要領で丁寧に作業を行った．岸辺で水面を覆うように繁茂した群落は，地下部を含めた植物体全体を注意深く掘り起こしながら水上に引き上げて，地上部とともに取り除いた（図 5 左）．また，砂州などの陸上に繁茂した群落は，できるだけ根が残らないよう掘り起こし，折れた茎や葉などを砂州に残さないよう注意深く取り除いた（図 5 右）．その際，切れて水面に落ちた茎や根，葉などはたも網ですくい取り，下流に流れるのを防いだ（図 5 左）．最初の発見場所である地点 L は面積が 2 番目に大きく 7.5 m^2 ほどあったが，目視や手探りによって確認できる限りの根や茎，葉を取り除くことができた（図 6）．

7 月 25 日には，愛知県と豊田市，豊田市自然観察の森から総勢 20 名が参加し，残っていたオオバナミズキンバイの駆除作業を約 5.5 時間かけて行った．集まった

図 5　オオバナミズキンバイの駆除の様子（左：岸辺，右：砂州）（2025 年 7 月 15 日撮影）．
青いヘルメットを被っているのが著者の一人である稗田．ヘルメットには「早期発見・迅速対応」を意味する「EDRR」（Early Detection and Rapid Response）の文字が書かれている（右）．

図 6　地点 L におけるオオバナミズキンバイの駆除前後の様子（2025 年 7 月 15 日撮影）．

図 7　地点 A におけるオオバナミズキンバイの駆除前後の様子（2025 年 7 月 25 日撮影）．

人員のほとんどは，オオバナミズキンバイがどのような植物か知らなかったため，実物を見せながら葉や花などの特徴を事前に説明した．作業は，河道内で群落を掘り起こしながら袋に詰める担当と切れて流れる茎や葉などをたも網ですくい取る担当，詰め終わった袋を岸辺に運ぶ担当に人員を分け，効率よく進めた．また，複数の地点で同時に作業を行うと，水面に落ちた断片を見逃す可能性があったため，作業場所の下流に河川を横断するように目幅約 5 mm のネットを張り，これらの流下を防いだ．

群落のうち，最も面積が大きかった地点 A は，砂州のほとんどがオオバナミズキンバイに覆われ，地下茎が深さ約 30 cm に達して縦横無尽に伸びていたものの，備中鍬やハンドスコップを用いて，目視や手探りで確認できる限りの葉や茎，地下茎を取り除いた（図 7）．他の群落では，葉の形がオオバナミズキンバイに似ているイヌタデ（*Persicaria longiseta* (Bruijn) Kitag.）などの在来植物が混在していたものの，取り残しを防ぐため，見分けがつかない場合はこれらもすべて取り除いた．また，地点 a-i の切れて流れたと思われる断片（図 4，表 2）については，確認された区間の河道内を複数名で踏査して取り除いた．これらの中には，芽が出始めている地下茎や葉の一部（図 8），葉を水面に出して浮かぶ茎の一部（図 9），堰下の水叩きに生えた藻類に引っかかり，

図 8　駆除で取りこぼした地下茎（左）や一片の葉（右）から再生するオオバナミズキンバイ（2025 年 7 月 25 日撮影）.

図 9　水面を漂うオオバナミズキンバイの断片（左）と葉基部から伸びた根の様子（右）（2025 年 7 月 25 日撮影）.

図 10　堰の下流に設置された水叩き（地点 d）で確認されたオオバナミズキンバイ（2025 年 7 月 25 日撮影）.
茎の断片が水叩きに生えた藻類に多数引っかかり，そこで生長し始めていた.

そこで生育し始めている茎の一部（図 10）などが含まれていた. これらはいずれも小さくて根が浅かったため，取り残すことなく駆除することができた.

2 回の作業によって，分布調査で確認された群落や植物体断片は目視や手探りで確認できる限り駆除することができ，その量は湿重量で約 520 kg に達した．これらは豊田市の廃棄物処理施設である渡刈クリーンセンターに持ち込み，焼却処分した.

おわりに

今回，発見した植物が特定外来生物オオバナミズキンバイであると判明してからは，分布状況の把握とそれらの駆除までを 10 日以内で完了し，外来種駆除の基本である「早期発見・迅速対応」を実践することができた. 侵入の初期段階であれば，迅速な駆除活動により分布拡大を抑止した事例が福井県中池見湿地（藤野，2023）や千葉県印旛沼（林ほか，2018：林，2021）で報告されて

いる．また,イギリスのイングランドやウェールズでは,定着が確認された複数の場所で地域的根絶に成功した事例も報告されている（Kamigawara et al., 2020；Renals, 2019）．西中山川と御船川で確認された規模の分布範囲であれば，分布拡大の抑止さらには局所的根絶の可能性が十分にあると考えられる．とはいえ，本種は繁殖力・分散力が極めて高く，わずかな地下茎や茎の切れ端，一片の葉からも再生するため（稗田，2018a；Hieda and Noma, 2019；伊藤・茂垣，2021；田中ほか，2020），これらをすべて取り除くことは容易ではない．実際に，駆除後に実施した巡回調査では，駆除しきれずに残された地下茎や茎，群落から脱落して流下したと思われる出芽した地下茎や茎の断片が複数見つかっており，再び繁茂して分布域を拡大する危険性は残されている．今後は，群落を駆除した場所や下流域での再生・繁殖の有無を定期的に巡視し，根絶に向けた駆除活動を継続的に実施していきたい．

謝辞

オオバナミズキンバイの駆除活動を実施するにあたり，愛知県環境局自然環境課，愛知県建設局河川課，愛知県豊田加茂建設事務所維持管理課，愛知県西三河県民事務所豊田加茂環境保全課，豊田市環境部環境政策課，豊田市建設部河川課，豊田市都市整備部公園緑地課，豊田市産業部農業振興課，豊田市自然観察の森，豊橋市自然史博物館，三河生物同好会の皆様にご協力いただきました．ここに記して感謝申し上げます．

注

1）オオバナミズキンバイ *Ludwigia grandiflora* (Michx.) Greuter & Burdet は，基亜種となるオオバナミズキンバイ *L. grandiflora* (Michx.) Greuter & Burdet subsp. *grandiflora* と亜種となるウスゲオオバナミズキンバイ *L. grandiflora* (Michx.) Greuter & Burdet subsp. *hexapetala* (Hook. & Arn.) G. L. Nesom & Kartesz に分類される．これら 2 亜種はまとめて「ルドウィギア・グランディフロラ」として特定外来生物に指定されていることから（国立環境研究所 HP），本稿では亜種レベルの分類をせずに種としての「オオバナミズキンバイ」として表記した．なお本稿における学名は，YList（米倉・梶田，2003–）を参考とした．

2）本報告までに侵入が確認されていたのは 11 府県（鹿児島・福井・滋賀・京都・大阪・兵庫・和歌山・三重・千葉・茨城・山形）であり（国立環境研究所 HP），愛知県は 12 番目の確認となった．その後，2025 年 8 月には静岡県浜松市でも発見・駆除されたことから（早川ほか，未発表），2025 年 10 月時点で侵入が確認されているのは 13 府県となる．

3）地図は「国土数値情報」（国土交通省）の「行政区域データ」（https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-N03-v2_3.html）と「河川データ」（https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-W05.html），MIERUNE 社の地図タイル「MIERUNE」（MIERUNE Inc. © OpenMapTiles © OpenStreetMap contributors）を加工して作成した．

4）豊橋市自然史博物館は，2025 年度特別企画展エイリアンプラント・バスターズ―侵略的外来植物対策展―（会期：2025 年 7 月 11 日–2025 年 8 月 31 日）に合わせてトレーディングカードを制作し，オオバナミズキンバイは愛知県内未侵入の侵略的外来種として収録していた（稗田ほか，2025）．豊田市内での本種の確認は特別企画展の会期中であり，収録内容を修正することができなかったため，豊田市での発見の経緯や専門家としての派遣および防除の様子，早期発見･迅速対応の重要性についてパネルを作成し，緊急展示を行った．また，この緊急展示に至る経緯について 2025 年 7 月 18 日に豊橋市自然史博物館から報道発表を行った．

5）豊田市の報道発表を受けて，以下のメディアで取り上げられた．
中日新聞（愛知県内版）：オオバナミズキンバイ確認　繁殖力強い外来植物，豊田の川で県内初．（2025 年 7 月 24 日発行）．
矢作新報：特定外来生物オオバナミズキンバイ　愛知県内で初　御船川で確認．（2025 年 8 月 1 日発行）．
CBC テレビ：“コメ”を脅かす最強級外来種「オオバナミズキンバイ」除草剤が効かない⁉　小さな破片からも再生する脅威の繁殖力．（YouTube で公開，2025 年 9 月 22 日閲覧）．

引用文献

藤野勇馬（2023）中池見湿地で確認された特定外来生物とその現状．福井市自然史博物館研究報告，70：59–62.

Grewell, B. J., M. D. Netherland, and M. J. Skaer Thomason (2016) Establishing Research and Management Priorities for Invasive Water Primroses (*Ludwigia* spp.). U. S. Army Corps of Engineers, Engineer Research and Development Center, Environmental Laboratory.

林　紀男（2021）手賀沼・印旛沼流域での侵略的外来水生植物の現状と水環境への影響．用水と廃水，63(7)：495–501.

林　紀男・八鍬雅子・中野一宇・半沢裕子（2018）印旛沼・手賀沼でオオバナミズキンバイ *Ludwigia grandiflora* 初記録．千葉県生物誌，67(1，2)：23–28.

稗田真也（2018a）こんな雑草こんな問題：湖岸を覆う侵略的外来植物オオバナミズキンバイ．植調，52(9)：23.

稗田真也（2018b）特定外来生物オオバナミズキンバイの生活史特性から繁茂の理由を探る．日本環境動物昆虫学会誌，

29(3)：91–93.
稗田真也（2022）琵琶湖における特定外来生物ウスゲオオバナミズキンバイの侵入・繁茂について．日本生態学会誌，72：35–39.
Hieda, S. and N. Noma (2019) Leaves as propagules of the invasive aquatic plant *Ludwigia grandiflora* subsp. *hexapetala* in Lake Biwa. Bulletin of Kansai Organization for Nature Conservation, 41: 151–153.
Hieda, S., Y. Kaneko, M. Nakagawa and N. Noma (2020) *Ludwigia grandiflora* (Michx.) Greuter & Burdet subsp. *hexapetala* (Hook. & Arn.) G. L. Nesom & Kartesz, an invasive aquatic plant in Lake Biwa, the largest lake in Japan. Acta Phytotaxomica et Geobotanica, 71(1): 65–71.
Hieda, S., K. Ota, K. Nagamine, H. Kobayashi and N. Noma (2023) Incidence of Germinable Seeds of *Ludwigia grandiflora* subsp. *Hexapetala* (Onagraceae) in the Feces of Lake Biwa's Waterfowl. Acta Phytotaxonomica et Geobotanica, 74(1): 47–51.
稗田真也・菊地波輝・一田昌宏（2025）特別企画展「エイリアンプラント・バスターズ―侵略的外来植物対策展―」における新しい試み．用水と廃水，67(10)：75–81.
伊藤彩乃・茂垣はるえ（2021）霞ケ浦およびその周辺における侵略的外来水生植物の現状．用水と廃水，63(7)：34–40.
上河原献二（2016）侵略的外来種管理における早期対応論と政策過程：水陸両生外来植物対策に関する事例研究．環境情報科学学術研究論文集，30：133–138.
Kamigawara, K., K. Nakai, N. Noma, S. Hieda, E. Sarat, A. Dutartre, T. Renals, R. Bullock, J. Haury, B. Bottner and J. P. Damien (2020) What kind of legislation can contribute to onsite management?: Comparative case studies on legislative developments in managing aquatic invasive alien plants in France, England, and Japan. Journal of International Wildlife Law and Policy, 23: 83–108.
環境省 HP a：日本の外来種対策：侵略的な外来種．https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/invasive.html（2025 年 9 月 5 日閲覧）.
環境省 HP b：日本の外来種対策：生態系被害防止外来種リスト．https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html（2025 年 8 月 8 日閲覧）.
環境省 HP c：日本の外来種対策：特定外来生物の見分け方（同定マニュアル）植物．https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/manual.html（2025 年 7 月 1 日閲覧）.
国立環境研究所 HP：侵入生物データベース：ルドウィギア・グランディフロラ　備考　令和 6（2024）年度　環境省「特定外来生物の市区町村別侵入状況の把握のためのアンケート」調査の結果．https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/81560.html（2025 年 8 月 8 日閲覧）.
京都府 HP：特定外来生物「オオバナミズキンバイ」について．https://www.pref.kyoto.jp/gairai/oobanamizukinbai.html（2025 年 9 月 5 日閲覧）.
嶺田拓也・中井克樹・林　紀男・丸井英幹（2020）農業被害をもたらす侵略的外来水草の対策と課題．水土の知，88(11)：887–891.
内藤麻子・稗田真也（2014）和歌山県の帰化植物　その 8 オオバナミズキンバイ（アカバナ科）．自然博物館だより，32(3)：5.
中井克樹（2021）滋賀県・琵琶湖における侵略的外来水生植物対策の経緯概説．用水と廃水，63(7)：34–40.
Renals, T. (2019) The GB Water Primrose *Ludwigia grandiflora* Eradication Programme: 2018 Progress Report, Environment Agency.
瀬口雄一・鶴谷未知・梶　圭佑・日下慎二・弓場茂和（2022）淀川におけるオオバナミズキンバイの除去手法の開発．応用生態工学，22(4)：267–278.
志賀　隆・首藤光太郎・横川昌史・加藤　将・稗田真也・倉園知広・山ノ内崇志（2018）関西の水草．大阪市立自然史博物館.
滋賀県 HP：侵略的外来水生植物（オオバナミズキンバイ・ナガエツルノゲイトウなど）への対策．https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/shizen/14022.html（2025 年 8 月 8 日閲覧）.
須山知香・佐藤杏子・植田邦彦（2008）侵略的水草 *Ludwigia grandiflora* subsp. *grandiflora*（新称：オオバナミズキンバイ，アカバナ科）の野外生育確認およびその染色体数．水草研究会誌，89：1–8.
田中周平・大島靖弘・長谷川達朗・高見　航・Zhang Hongwei・渡部優希・田淵智弥・西川博章・藤井滋穂（2020）特定外来生物オオバナミズキンバイの茎断片からの再生に及ぼす影響要因の検討．土木学会論文集 G（環境），76(7)：III_349-III_354.
豊田市 HP：報道発表資料：愛知県内で初めて確認された特定外来生物オオバナミズキンバイの駆除作業を実施します．https://www.city.toyota.aichi.jp/pressrelease/1067902/1069181.html（2025 年 9 月 22 日閲覧）.
横川昌史・高田みちよ・長谷川匡弘（2020）大阪府における特定外来生物オオバナミズキンバイ（広義）（アカバナ科）の現状．大阪市立自然史博物館研究報告，74：75–82.
米倉浩司・梶田　忠（2003–）BG Plants 和名―学名インデックス（YList）．http://ylist.info（2025 年 9 月 11 日閲覧）.

1）豊田市矢作川研究所：
〒 471–0025　愛知県豊田市西町 2–19　豊田市職員会館 1 階
2）豊田市自然観察の森：
〒 471–0014　豊田市東山町 4–1206–1
3）豊田市環境部環境政策課：
〒 471–8501　愛知県豊田市西町 3–60　豊田市役所環境センター 1 階
4）豊橋市自然史博物館：
〒 441–3147　愛知県豊橋市大岩町字大穴 1–238（豊橋総合動植物公園内）